通年性アレルギー性鼻炎患者を対象としたモメタゾンフランカルボン酸エステル鼻噴霧用ステロイド薬の効果と気道病態への影響

山田 武千代，　山本英之，　窪 誠太，　坂下雅文，　意元義政，　扇　和弘
伊藤有美，　藤枝重治
福井大学耳鼻咽喉科

アレルギー性鼻炎や気管支喘息などは気道全体をアレルギー疾患の標的臓器として考えるべきであるとして、one airway one diseaseの概念が提唱されている。喘息のないアレルギー性鼻炎患者においても喉頭や下気道（口呼吸時の気道）に好酸球の浸潤を認めることも多く、喉頭アレルギーやアトピー咳嗽などの病態を合併している場合も想定される。通年性アレルギー性鼻炎患者の薬物療法の中でも新規の鼻噴霧用ステロイド薬は局所に微量で投与しても全身にほとんど吸収されず第二世代抗ヒスタミン薬より効果が高いことが確認されている。今回我々は、通年性アレルギー性鼻炎患者を対象としたモメタゾンフランカルボン酸エステル鼻噴霧用ステロイド薬の無作為化クロスオーバー群間比較、2アームで実施し、その効果と口呼気中NO（気道の好酸球炎症の程度を反映）の影響を検討した。鼻症状スコアは2週後にプラセボ群で+2.82（ベースライン比較）、実薬群で-1.44（$p<0.0001$）、咳スコアはプラセボ群で+2.17（ベースライン比較）、実薬群で-0.55（$p=0.0597$）であった。口呼気中NOは全体で2週後にプラセボ群、実薬群ともに有意に減少したが、鼻症状スコアが比較的低い症例では2週後に実薬群のみが有意に減少した。